

最高かもしれないプレゼント

その夜のSでのこと。その日は愛抱夢の誕生日だと少し話題になった。同学年であるチェリー、ジョーのうち一番最初に誕生日を迎えるのが愛抱夢らしい。

チェリーとジョーは *“Siala Ince”*^{シアラルーチェ} で愛抱夢の誕生日祝いを先に済ませていると言っていた。三人で飲んだときに愛抱夢の誕生日が近いことに気づき高級ワインを一本開けたということだった。

「まあ僕たち子供がプレゼントあげるのも変だしね。だいたい愛抱夢の誕生日なんて今知ったし、こつちだつて貰っていないしさ」と実也はスポーツゼリー飲料をずっと吸って涼しい顔だ。

「だな！」と暦が反応した。

確かにそうだと思うのだが――

ランガは暦にそつと耳打ちをする。

「暦は愛抱夢からバースデイプレゼントに花もらつていたよね……」
ペットボトルを握る暦の手が止まり表情が固まった。

「……」

「忘れていた？」

「ああ。綺麗さっぱりな。イヤな記憶はさつきと消去したかったんだろう——どうすつかな」

そんなイヤなことだったのか。どうでもいいけど、もう少し仲良くして欲しい。

「暦は愛抱夢の誕生日知らなかったんだし、気にしないでいいと思うよ」

「なんか借りをつくっているみたいで、俺がイヤなんだよ。おまえはなんか用意したのか？」

「愛抱夢は、理由をつけては俺に花や美味しいものくれるから、母さんに言われてプレゼント用意したんだ。高くないもの。愛抱夢は気持ちを喜ぶ人だよ」

「そっか。にしてもランガ……おまえ、餌付けされてんな。懐きすぎなんだよ」

「そうかな……」

「まったく……」

そんなやりとりをするランガと暦の背後から——

「やあ、ランガくん。さつきの滑り見ていたよ。いつもながら攻撃的でラブリーな滑りで素晴らしかったよ」

まさに噂をすれば影だ。

「愛抱夢……ありがとう。それと……誕生日おめでとう。プレゼント用意してあるんだ。あとでね」

「気にしなくていいんだよ。でもランガくんの気持ちは嬉しいなあ」

ランガの後ろで気まずそうにしている暦にチラリと愛抱夢は視線を送った。

「おや？ そこにいるのはもしかして赤毛くんかな？ 何か言いたそうにこちらを見ているようだ。また僕たちの邪魔をしようと考えているのかい？」

「ち、ちげーよ。おまえ、誕生日なんだつてな」

「それがどうかしたのかな」

暦がふいつと目を逸らした。

「俺の誕生日のとき花もらっちゃってっているからさ、何か返さなくちゃとは思っていたけど、今日、誕生日なんてさつき初めて聞いたし……」

「ああ、あの花はね。ちよつとした気まぐれだから気遣いはいらないよ。どうせ大した意味はない。僕も今の今まで“綺麗さっぱり”忘れていたからね」

「綺麗さっぱり」のところを大声で強調していた。もしかして……愛抱夢も暦と同じようにイヤな記憶だったのだろうか。

「それだともうスッキリしない。借りはさつさと返したい……そうだ……」

暦はいきなりランガの肩をつかみ、ドンつと愛抱夢の方へと突き飛ばした。

「うわっ！」

ランガは一瞬バランスを崩すがなんとか踏ん張り、振り返って暦に文句を言う。

「何するんだよ！ 暦」

「俺からのバースデイプレゼントは……こいつだ！」

「はあ？」

「今夜のSに限り、俺はランガと滑らない。今夜だけは我慢してやる。だから思う存分ふたりに滑ってこい！」

「ほう……僕たちの仲を引き裂こうとしてこないってことかな。殊勝な心がけだ」

「ああ今夜だけだからな」

「今夜だけというのは引つかかるが。まあよからう」

ランガの希望を訊くこともなく、暦と愛抱夢の間で話がまとまってしまった。

まあいいか。ふたりが仲良くなってくれているようで、良かったと少し安心する。

「それではランガくん。バースデイビーフをはじめるとしよう」

「わかった」

愛抱夢が軽く膝を折り、うやうやしく手を差し出してくる。そこにランガは自分の手を重ねた。そうすることがごく自然であるかのように。

あんぐり口を開けた唇や呆れ顔の仲間たちのため息に気づくこともなく、ふたり仲良く手を繋いでスタート地点を目指し走っていった。

《了》